

春風秋霜 11月号

平成27年11月1日

島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 日本語を大切に

島田第一小学校の学校便りに、外国人は虫の声を機械音や雑音と同様に右脳で処理するが、日本人は虫の声を左脳の言語領域で処理しているという記事が載っていました。確かに、「リーン リーン」「スイッチョン」などと、子供の頃から虫の声を言葉で表していたなと思います。日本には、様々な虫や鳥の声を擬音として認識する文化があると思います。

最近、ラジオ番組で大和言葉の衰退を危惧する話をしていました。言葉にはその国民の精神性が表れるそうです。その例として、「しとやか」「しっとり」「小糠雨」「花曇」など、日本語には、言葉では伝えにくい状態としては分かるものがあります。日本語に表現があるということは、日本人に様子や状態を細かく感じ取る文化や感性があるからでしょう。

脳科学では、言葉を使うことでその言葉に合った感覚が育つと言われますから、感動する時、何でも「やばい」と表現する現代っ子の感性が心配です。虫の声を楽しむことのできる日本語を大切に、大和言葉を通して日本人の豊かな心を子供たちに伝えたいものです。豊かな言葉を使うことにより、豊かな心も育てたいものです。

2 「企画×広報」について

教育委員会関係の会議でいただいた文章の中に、企画×広報＝0になってしまうという文章がありました。その内容を紹介します。

- ・ 「企画」と「広報」は、掛け算であり、どちらかがゼロでも結果はゼロになってしまう。講座に人が集まらないのは、「企画力」や「広報・PR力」が不足しているから。
- ・ 企画段階でターゲットを徹底的に絞り、対象者の心に響くタイトルを付けることが大事。
- ・ キャッチコピーは、集客に重要な要素。ゴールの見えるタイトルにしたい。

例 「子育てママのためのお金がたまる家計術」

「その一言を相手に伝えるコミュニケーション術」

学校では、学級懇談会やPTA教育講演会など、できるだけたくさんの人に集まって欲しい時があります。時には、内容が充実していても参加者が少ないということがあります。今後の企画において、企画内容と共に広報についても大切にしてほしいと思います。

○ 人が集まらない講座名の例

法律・条文そのまま型「〇〇啓発講座」、社会背景タイトル型「男女共生時代を生きるわたし」、疑問形「共同って何?」、相手の立場否定型「親父改造講座」、レッツ型「地域で子育てを楽しもう」など

3 御手杵の槍の展示について

10月17日(土)と18日(日)にびーファイブにおいて、御手杵の槍の公開が行われました。この槍は、440年ほど前に島田市の刀鍛冶によってつくられた日本三大名槍の一本ですが、昭和20年の東京大空襲で焼失してしまいました。平成15年に島田市の顕彰会の皆様の尽力により、レプリカが作られ、茨城県結城市に寄贈されていました。その槍の拵え(こしらえ:槍の飾り鞆)が熊の毛皮で新調されたことを縁に島田市に里帰りしたのです。

この槍は、『刀剣乱舞』というオンラインゲームに登場し、若い女性の人気になりました。槍の所蔵先の結城市では多くのファンが集まったそうです。島田市での公開にも二日間で約 3400 人が訪れました。北海道など遠方から来たファンもいたそうです。魅力があるものは、距離や費用に関係なく、人が集まるということを示しています。

この槍は、島田市の博物館が来年 10 月に行う刀剣の企画展にも展示される予定ですので、興味のある方は、企画展に会場してみたいでしょうか。



4 博物館が変わる？！

新聞報道もあったので知っている方も多いと思いますが、博物館エリアの愛称が「ヒストピア島田」に決定しました。全国に公募し、応募総数 525 点から選ばれた名称がこの愛称です。

9 月 12 日から 10 月 25 日まで行われた、棟方志功展は地方ではなかなか見ることのできない作品まで展示され、多くの来館者を集めました。川越し街道の活用も規制が緩和され様々な活用が検討されています。今後は、博物館や分館の企画展の充実、川越し街道の活用など、様々な魅力ある提案が期待されています。

愛称決定を受け、無料開放日も設けられますので、「ヒストピア島田」の積極的な活用をお願いします。

肘 かけ 椅子

北島 正 教育委員

『黒川能と水鷗流居合剣法をつなぐもの』

黒川能にかかわり始めて約 10 年経った。月に一度、大草町内の実行委員の有志で能に関する勉強会を続けている。毎回 15 人前後が公会堂に集まって 2 時間位、非日常の時空を楽しんでいる。といっても、10 年前は私を含め全員がそれまで能には全く縁がなく、何の知識も持ち合わせていなかった。とりあえずテキストとしてなるべく簡単な本を読むことにした。

林望著の「これならわかる能の面白さ」という本をまず選んだ。実際には、私が朗読するだけであり、質問があっても答えることができないことを了解してもらうしかなかったが、幸いこれが良くて本で、文章に品格があり、リンボウ先生自身声楽や謡をやっているだけに、朗読することを意識して書かれたものかと思うほど、読む方も聴く方も心地良くなって時間を忘れる思いがしたものだ。おかげで、代表的な能の演目とその見どころなど、初心者としての最小限の知識と共に「能というもの」の本質が何となく心に浸み込んできたような感覚を覚えたものだった。

次のテキストは白洲正子著「雨滴抄」を選んだ。これまた自身がかつて仕舞の稽古を通じて能の文化を心身に浸み込ませた人物の著書らしく、日本の文化の歴史に登場する人物について、現代に生きている人物であるかのような語り口で感性豊かに表現されていた。こういう感覚は、縁あって続けている四百年以上継承されている水鷗流居合の修行でも感じることもある。水鷗流創始者の三間与一左衛門の人物像はよく解らないが、居合の稽古中は過去に生きているかのような感覚を覚えることがあり、流祖と同じ空気を吸いながら、古より伝わる「強く生きるための何か」を共有しているような幸せ感を、たまにはあるが感じる。もっとも、やればやる程、課題（苦行といってもよい）は増えるのだが・・・。

10 月 18 日、今年も庭のフジバカマにアサギマダラがやって来た。数千キロの旅路よ、苦しくも楽しかれ！